

調 査

第3回学生社会意識調査

— 調査結果とその分析 —

The Third Research of Student's Social Consciousness

瀬 島 順一郎¹⁾
Junichiro SEJIMA

岩 本 勲²⁾
Isao IWAMOTO

東福寺 一 郎³⁾
Ichiro TOFUKUJI

はじめに

筆者らは、1980年代の学生の社会意識を調査するために各年毎に大阪と三重の大学短大の学生に対して質問紙による調査を始めて今回で第3回目を迎えた。大学で常に学生と接している筆者らの経験から、変わりつつある現代の学生の動向を客観的に把握し、より適切な大学教育のあり方を模索する必要を感じ、ごく限られた範囲ではあるが調査を開始したわけである。経年的なうつり変わりを見るために質問項目は一部をのぞきできるだけ同じものを使うことにしているが、政治意識については、時々刻々変化する政治情勢に対応するために毎回異なった項目を設定するようにしている。今回は、中曽根首相の外交、軍事政策についての項目と、ロッキード裁判についての項目を設定した。余暇の過ごし方は従来通りとし、読書傾向については、前2回の調査では3冊挙げてもらっていたのを、今回は1冊を挙げてもらうようにした。したがって、数項目については毎回の検討と分析を独立して行う必要があるが、大部分は前2回の調査との比較検討が可能であると考えられる。

(1) 調査目的

1980年代における大学生（短大を含む）の社会意識の経年的変化を分析する。

(2) 調査項目

政治意識と余暇の過ごし方、および読書傾向、質問項目については後掲調査票参照。

(3) 調査対象

大阪産業大学 (277名 以下カッコ内は人数を示す)

大阪大学 (174)、大阪工業大学 (86)、三重大学 (174)、三重短期大学 (76)

帝塚山短期大学 (93) 計 885名、内 男 616名、女 268名、コード不明 1名

(4) 調査方法

質問紙法による集団調査

(5) 調査期間

1983年6月20日—7月15日

分析については、前回調査との比較、大学別、男女別について検討した。執筆の分担はⅠの政治意識は岩本が、Ⅱの余暇の過ごし方は東福寺が、読書傾向については瀬島がそれぞれ行った。

調査にあたっては帝塚山短期大学の森一貫氏、三重短期大学の山田全紀氏にご協力いただいた。集計作業では三重短期大学の政治学、心理学のゼミナールの学生の皆さんに手伝っていただいた。集計処理、データ作成は三重電子計算センターにお願いした。紙面を借りてお礼申しあげたい。また前2回の調査は筆者らの自費によるものであったが今回は大阪産業大学産業研究所の特別研究費により充分な調査が可能となった。あわせてお礼申し上げる次第である。

*昭和59年4月5日原稿受理

1) 大阪産業大学 2), 3) 三重短期大学

I

学生は、インテリゲンチヤーの中でも最も敏感な部分である。この部分の政治離れが指摘されて以来、すでに久しい。今回の調査でも、政治的満足度が若干上昇し、政治的関心度が低下していることが示されている。ここに日本全体の政治的無関心と諦念の進行が反映されている。現に、83年に行われた、統一地方選挙、参院通常選挙、総選挙のいずれをとっても、きわめて低い投票率で、後二者の場合は戦後最低の投票率であった。それは、基本的には、自民党の微動だにしないかのごとく思われた単独支配の安定性と野党の無力感に起因する。だが、83年末総選挙での自民党の惨敗と与野党伯仲は、たとえその結果が保保連合によって重要な部分で帳消しにされたとはいえ、政治的流動化と国民の政治的意識の一定の活性化傾向を生まざるにはおかないであろう。したがって、実施を予定している84年学生社会意識調査と83年のそれとの比較は興味深い問題を提起するにちがいない。

以下の分析においては、とくに、われわれの81年学生社会意識調査結果との比較を一つの柱として論を進めたい。

学生の政治的不満層（「やや不満」と「非常に不満」の合計は59.9%、政治的満足層（「やや満足」と「非常に満足」の合計）は9.1%である。学生の過半数が何らかの意味で、現代政治に不満をもっている。この割合は81年調査結果とほぼ同様であるが、80年調査結果より約10%低下している。

表1 政治的満足度 (%)

	全 体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
政治的満足	9.1	8.3	10.0	10.6	6.7	6.3
どちらともいえない	31.0	32.3	28.2	26.2	37.3	38.0
政治的不満足	59.9	59.2	61.7	63.1	55.5	55.4

朝日新聞世論調査（83年11月30日、12月1日実施、全国有権者対象、サンプル数3,000人、層化無作為抽出法）では、全国有権者の58%が政治的不満足となっている。今回のわれわれの調査と朝日新聞のそれは、調査時期や方法が異なるため、両者の単純な比較は慎しむべきであるとの留意をしよう。学生としての政治的不満足層の割合と全国有権者のそれとは、基本的に同程度のもので、とくに学生としての特徴はみあたらない、と結論できよう。

政治的満足層は、80年調査結果より2～3%、81年調査結果より1%上昇し、政治的満足層が若干ながら増加しつつある。

政治的不満足層を男女別に分けた場合、男 61.7%、女 55.5%で、男が女より政治的不満足度が高い。同時に、政治的満足度でも、男10%、女 6.7%で、男が高い。この両傾向は81年調査結果とも一致する。いいかえれば、男は、政治に対して、満足、不満足いずれにせよはっきりした態度をもっている、ということである。このことは、政治に対して「どちらともいえない」層が、男28.2%、女 37.3%という結果にも示されている。この傾向も81年調査結果と同様である。

大学別では、「政治的不満足」層の最高は大阪大学66.7%、最低は帝塚山短大45.2%、「どちらともいえない」層の最高は帝塚山短大47.3%、最低は大阪大学23.6%とである。

政治的不満の原因のトップが「政治家が党利・私利のみ追求」54.2%、第2位が「汚職や選挙違反など不明朗なことが多い」32.0

表2 政治的不満足原因の上位4位 (%)

	全 体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
政党や政治家は党利・私利のみを追求する	54.2	48.8	53.2	52.7	56.6	45.3
汚職や選挙違反など不明朗なことが多い	32.0	41.8	28.9	36.5	39.0	46.6
平和と民主主義を守る努力が払われていない	27.5	21.1	26.0	23.6	30.9	18.7
物価高などで生活が楽にならない	20.3	22.6	22.2	20.4	15.7	24.8

%である。81年調査結果でもこれら2原因が上位2位を占めていた。ただし、83年調査結果は、政治家の党利・私利追求にたいする批判がいくぶん高まっていることを示している。これは、ロッキード裁判における田中論告求刑が1月に行われたにもかかわらず、田中元首相が居直りをつづけ、中曽根首相がこれを擁護しつづけたことにたいする批判が強まった結果と考えられる。

「平和と民主主義を守る努力が払われていない」とする層が27.5%で、不満足原因の第3位を占めたことは、注目すべきである。81年調査結果では、この項は21.1%で第4位であり、80年調査結果では、それは20%以下であった。このことは、83年に入り、学生の間で、平和と民主主義にたいする関心がある程度回復してきたことをうかがわせている。これは、82年末に成立した中曽根内閣が、日本不沈空母論やシーレーン防衛を公然と打ち出し、軍国主義諸政策を急速に強めてきたことに対する一つの反動であり、同時に、81年代からの欧米における爆発的で持続的な反核平和運動の高揚と82年の日本における同様の運動のかつてない高まりの反映とみることができるであろう。

「物価高」等を政治的不満足原因とする者は20.3%で第4位。81年調査結果ではこれが22.6%、80年度のそれは24.5%であった。物価高にたいする不満足度の若干の低下は、ここ2、3年間の物価のある程度の鎮静化（消費者物価指数＝前年度比、80年107.8、81年104.0、82年102.4、83年101.9）を反映している。

政治的不満足原因についての性差のうち、「平和と民主主義」の項で、これまでとは全く逆の傾向が生じている。今回の調査結果では、この項で、女30.9%、男26.0%で、女が男を上回った。これが何に帰因するか、あるいは偶然的な結果なのか、いまのところ不明であるがⅡの余暇の過ごし方、読書傾向での数項目における男女の逆転（テレビ番組のニュースを見る率、読書、作家の度数等）をあわせて考えると興味深い変化も示唆されよう。

「平和と民主主義」の項で、学校別にみると、最高が三重大学38.4%、最低が大阪産業大学19.7%である。

「物価高」の項では、トップが大阪産業大学30.7%、次が大阪工業大学28.6%、その他の大学は20%未満で低く、とくに大阪大学10.2%、三重大学10.6%となる。ここには、私立大学と国立大学の学生のおかれている状態の不平等性とその不満の違いが際だって示されている。

政治的関心層（「非常に関心がある」と「多少ある」の合計）は44.5%、無関心層（「あまり関心がない」と「ほとんどない」の合計）は40.9%、無効14.6%である。81年調査結果と比較すれば、政治的関心層は約10%低下し、政治的無関心層はほとんど変化はない。ただし、今回は無効数が異常に高かったため、今回の数値の信頼性はあまり高いものではない。

表3 政治的関心度 (％)

	全体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
政治的関心がある	44.5	55.7	45.7	64.6	41.8	42.0
政治的関心がない	40.9	40.5	40.6	33.4	41.8	51.7
無効	14.6	3.8	13.8	2.1	16.4	6.5

政治的関心度における性差については、男が女より関心度が高い、という一般的な傾向は、今回も変化はなかった。しかし、男だけをとり出して81年、83年両調査結果を比較すれば、政治的関心度は、83年調査で統計誤差の範囲を超える約20%の低下を示し、政治的無関心度は7%弱上昇している。さらに、これを80年度調査と比較すれば、政治的関心度は、27%も低下している。今回調査が、参院選直後に行われたにもかかわらず、このような政治的関心度の低下には、注目しておかねばならない。

政治的関心度を学校別に比較すれば、最高が大阪大学55.8%、最低が大阪工業大学33.8%、政治的無関心度の最高が大阪産業大学49.5%、最低が大阪大学が23.0%である。

政治に関心をもつ理由は、トップが「生活に関係があるから」45.2%、第2位が「平和と民主主義

を守るため」24.1%，第3位が「政治がおもしろいから」18.8%である。これを81年調査結果と比較した場合、順位も数値もほとんど変化はない。今回の調査の性差については、「生活に関係あるから」が男43.8%，女49.1%，「平和と民主主義を守るため」が男24.9%，女21.4%，「政治がおもしろいから」が男24.6%，女14.3%となっている。女が自分の身近な生活から発想し、男が社会的な側面から発想する傾向は、81年調査と比較して、大きな変化はなかった。ただし、これと、さきにみた政治的不満足原因のうち、「平和と民主主義が守られていない」とするのが、男よりも女の方が割合が高かったことを考え併せた場合、両者の間に整合性を欠いており、この原因は分らない。

表4 政治的関心原因の上位3位 (%)

	全体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
自分の生活に関係する	45.2	43.2	43.8	35.5	49.1	61.6
平和と民主主義を守るため	24.1	25.0	24.9	29.0	21.4	15.4
政治がおもしろいから	18.8	22.2	20.6	22.6	14.3	23.1

政治に関心をもたない理由のトップが、「個人の意見は政治に何の影響も与えない」32.6%，第2位が「政治問題はむずかしい」24.3%，第3位が「自分の生活に関係ない」16.3%となっている。これらと81年調査結果を比較した場合、「自分の生活に関係ない」が7%ほど上昇し、「政治問題はむずかしい」は10%ほど低下している。

表5 政治的無関心原因の上位3位 (%)

	全体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
個人の意見は政治に何の影響も与えない	32.6	31.3	31.2	37.5	35.7	25.0
政治の問題はむずかしい	24.3	34.4	20.8	18.8	32.1	50.0
個人の生活に関係ない	16.3	9.4	16.0	12.5	17.0	6.3

支持政党の有無については、「支持政党なし」が78.5%で、「支持政党あり」19.0%を圧倒している。「支持政党あり」は男20.9%，女14.6%，「支持政党なし」は男76.1%，女84.0%である。これら傾向は、81年調査結果のそれとほぼ同様である。

表6 政党支持率 (%)

	全体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
支持政党あり	19.0	18.3	20.9	22.0	14.6	15.0
支持政党なし	78.5	78.4	76.1	75.6	84.0	80.7

「支持政党あり」と答えた者のうち、圧倒的多数が自民党支持で44.0%，次いで共産党支持16.1%，社会党支持11.3%となっている。

これを全国有権者の政党支持率と比較すれば、共産党支持率がかなり高いことが特徴である。これをまた、81年調査結果と比較すれば、自民・社会両党の支持率が低下し、ほぼ社会党と共産党の支持率が逆転している。

表7 特定政党支持率 (%)

	全体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
自民党	44.0	52.6	41.1	44.0	53.8	64.4
共産党	16.1	13.3	17.1	14.0	12.8	12.3
社会党	11.3	16.2	10.9	21.0	12.8	9.6
公明党	7.7	8.1	8.5	8.0	5.1	8.2
民社党	5.4	4.0	6.2	5.0	2.6	2.7

特定政党支持率における性差もかなり顕著である。自民党支持率が男41.1%，女53.8%，共産党支持率が男17.1%，女12.8%で、女の保守的傾向がよく示されている。なお、参議院選挙における比例制度導入によって生まれた、ミニ政党は、かつて新自由クラブが学生の間で爆発

的に得たような人気を得ることはなかった。

以上の結果から、学生の保守化傾向を読みとることができるが、しかし、自民党支持者といっても、総サンプル数の中では9.6%にすぎないことも留意すべきである。

大学別の特定政党支持率では、自民党支持率のトップが大阪工業大学73.7%、次いで帝塚山短大61.5%、共産党の支持率のトップが大阪大学27.8%、社会党支持率のトップが三重大学25.0%となっている。

政党を支持しない理由の第1位は「政党の主張がわからない」29.6%、第2位は「政党は派閥争い等に終始している」26.3%、第3位は「政党の政策に違いがない」11.9%である。1位と3位の理由は、ともに政党の主張が、学生の間に浸透していないことを示している。これだけで40%以上を占めている。以上の傾向については、81年調査結果とほぼ同様である。

表8 特定政党を支持しない理由の上位3位 (%)

	全 体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
政党の主張がわからない	29.6	31.5	28.6	21.8	32.0	39.7
政党が派閥争いに終始している	26.3	26.7	23.2	31.4	32.9	22.9
政党の政策に違いがない	11.9	9.4	12.2	9.3	11.1	9.8

政党不支持理由で顕著な性差はみられないが、「政党は派閥争い等に終始している」の項では男23.2%、女32.9%となっている。なお、これを81年調査結果と比較すれば、男女比は逆転している。

学生の政治的関心度の深さを示す、一つのバロメーターとして、新聞の読み方をとりあげてみよう。新聞を読む層（「かならず読む」と「だいたい読む」の合計）は72.8%。読まない層（「あまり読まない」と「ほとんど読まない」の合計）は24.6%である。今回の調査結果は、81年調査結果と比較して、新聞を読む層が若干低下していることを示している。

新聞を読むか、否かの大雑把な基準では、あまり性差は表われないが、「必ず読む」だけをとれば、男38.0%、女31.3%となって、ある程度の性差はみられる。新聞を読む率およびこれについての性差の傾向は、81年調査結果とほぼ同様である。

表9 新聞を読む割合 (%)

	全 体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
新聞を読む	72.8	75.5	73.4	75.2	71.6	75.7
新聞を読まない	24.6	22.5	24.2	23.3	25.7	21.7

興味ある紙面の第1位はスポーツ36.1%、第2位は社会25.9%、第3位は文化・科学12.4%、第4位は政治・経済10.5%である。この順位と割合は、81年調査結果とほとんど同様である。あいかわらず、学生があまり政治・経済面を読まないことが示されている。したがって、学生の半分ちかくが、政治に関心をもっていたとしても、関心の深さはまだまだ、という感がぬぐいえない。

興味ある紙面については、性差がはっきりと現われている。性差の著しいのはスポーツで男44.2%、女17.2%、その他は社会で男21.2%、女36.5%、政治・経済で男12.8%、女5.2%となっている。文化・科学は性差はないが、さすがに家庭・婦人は女14.6%、男0.2%となっている。このような性差は、やはり81年調査結果と同様である。

表10 興味をもって読む紙面 (%)

	全 体		男		女	
	83年	81年	83	81	83	81
スポーツ	36.1	32.0	44.2	45.6	17.2	19.2
社 会	25.9	28.5	21.2	19.6	36.5	36.0
文化・科学	12.4	11.5	11.7	12.9	14.1	10.0
政治・経済	10.5	10.1	12.8	14.6	5.2	5.7

(注：女だけをとれば、第4位は家庭・婦人である)

興味ある紙面について、学校別の特徴はある程度現われている。それぞれの紙面のトップをとると、スポーツは大阪工業大学61.5%、社会

は三重短期大学42.1%，文化・科学は大阪大学20.1%，政治・経済は大阪大学21.6%となっている。

学生が特定の政治問題についてどのような意識をもっているかを知るために、憲法第9条、自衛隊、中曽根内閣の軍事・外交政策、田中辞職問題の4つについて設問した。

憲法第9条について、改定反対層が62.8%に達し、81年調査結果より、若干増加していることが特徴である。第9条擁護派の増加は、前掲の朝日新聞調査その他でも確認されているところである。ちなみに、第

表11 憲法第9条に対する態度 (%)

	全体		男		女		朝日新聞	毎日新聞
	83年	81年	83	81	83	81	83	83
改定反対	62.8	58.2	61.2	57.1	66.4	59.3	78	52
どちらともいえない	25.6	28.4	25.3	25.5	26.5	31.0	10	32
改定賛成	9.7	11.9	11.9	16.3	4.9	8.0	12	13

9条改定反対派は朝日新聞調査で78%，毎日新聞世論調査（83年11月18—20日実施，20歳以上を対象，サンプル数3,000人，層別多段無作為抽出法）で52%となっている。

憲法第9条問題では性差がかなりはっきり現われている。「改定すべき」は男11.9%，女4.9%，「改定すべきではない」は男61.2%，女66.4%で，男の方がタカ派的であることを示している。また，「どちらともいえない」の項で，女は26.5%で，81年調査結果よりも5%ほど減少し，この問題について女の間で自覚の高まりがあることを示している。

第9条問題での学校別の特徴もある程度現われている。第9条改定反対のトップは大阪大学77.6%，改定賛成のトップは大阪産業大学16.2%となっている。

自衛隊については，第1位が「現状のまま」34.7%，第2位が「縮小すべき」32.9%で，81年調査結果と比較して順位は変わらない。ただし，「縮小すべき」が10%弱上昇していることが特徴的である。同時に，「強化すべき」8.9%で，4%ほど低下している。「解散すべき」は13.6%で若干低下している。ちなみに，前掲の朝日新聞調査では，現状維持60%，縮小19%，廃止5%，強化10%となっている。

前問との関連でいえば，憲法改定反対派（62.8%）の中味は，自衛隊現状維持派と縮小派（合計67.6%）となり，改定派9.7%と自衛隊強化派8.9%がほぼ重なり合うことになる。

自衛隊問題についての性差も，はっきり現われている。「縮小すべき」は，男28.2%，女43.3%で，縮小論は女に優勢である。「強化すべき」は男11.5%，女4.9%で，やはり男がタカ派的な態度を示している。これら性差の傾向は，81年調査結果と同様である。

表12 自衛隊に対する態度 (%)

	全体		男		女		朝日新聞	
	83年	81年	83	81	83	81	83	78
解散すべき	13.6	15.0	14.9	18.2	10.4	11.9	5	5
縮小すべき	32.9	23.3	28.2	18.2	43.3	28.3	19	11
現状のまま	34.7	37.8	36.9	38.2	29.9	37.2	60	61
強化すべき	9.5	13.0	11.5	17.6	4.9	8.8	10	18
わからない	8.9	10.5	7.8	7.5	11.6	13.1	6	5

自衛隊に対する態度について大学差はあまりないが，「強化すべき」の項で，大阪産業大学15.9%，大阪工業大学11.6%，とこの2校が10%を超えたことが目立っている。これは，前問における大学差とほぼ一致する。

中曽根内閣の軍事・外交政策については，圧倒的に「反対」が多く67.2%にのぼり，「賛成」はわずか6.8%にすぎない。中曽根首相の，派手な軍事力強化発言や軍事費の突出に，学生が反発したものと見える。この設問での性差は，「反対」の項ではほとんど現われなかったが，「賛成」の項で，男8.6%，女2.6%となり，今回の調査でたびたび確認されてきた男のタカ派的姿勢がここでも再確認

表13 中曽根内閣の軍事・外交政策について (%)

	全体	男	女
反対	67.2	66.7	68.3
わからない	25.4	24.2	28.4
賛成	6.8	8.6	2.6

される。

中曽根内閣の軍事・外交政策に「賛成」の多い大学はトップが大阪工業大学12.8%，次が大阪産業大学11.2%で，他の大学は5%未満である。

田中元首相の辞職問題については，「判決をまたずに辞職すべき」55.3%となり，学生の過半数が一審判決以前に辞職を要求している。一方，田中元首相に対する論告求刑直後に行われた朝日新聞世論調査（2月16—17日実施，全国有権者対象，サンプル数3000人，層化無作為二段抽出法）では，議員辞職を求めるものは75%に達し，読売新聞世論調査（1月29—30日実施，全国有権者対象，サンプル数3,000人，層化多段無作為抽出法）でも，議員辞職を求めるものは，75.3%に達した。今回のわれわれの調査の実施時期が，論告求刑から半年経ち，これら新聞調査時と異なり生々しい印象が薄れていた時期とはいえ，学生の田中問題に対する態度は，いささか甘いものといえる。

この問題についての性差をみれば，「判決をまたずに辞職すべき」が男51.6%，女63.8%，他方「どんな場合でも辞職すべきでない」が男7.6%，女4.9%となり，男に田中擁護派が多い。

この問題で，とくに目立った大学差はないが，「どんな場合でも辞職すべきでない」の項で大阪産業大学のみが10%を超えた。

表14 田中辞職問題について (%)

	判決前に辞職すべき	一審有罪で辞職すべき	最終審有罪で辞職すべき	どんな場合にも辞職すべきでない
全体	55.3	11.4	19.1	7
男	51.6	12.0	20.6	8.0
女	63.8	10.1	15.3	4.9

II

・余暇の過ごし方

余暇の過ごし方17項目に対する回答結果を図1に示す。余暇の過ごし方のトップは前回同様「レコード，FM放送を聞く」で39.1%（男40.1%，女36.9%）である。前回に比べ，男子は減少，女子は増加傾向にあ

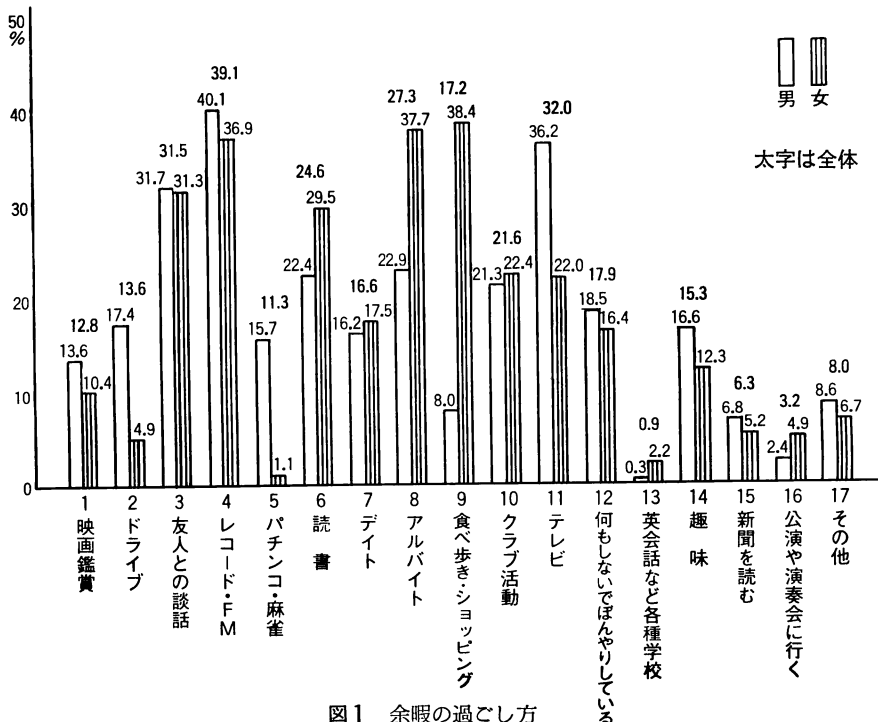


図1 余暇の過ごし方

るが、全体の比率は横ばい状態であり、学生に定着した音楽愛好率を示していると考えられる。第二位は「テレビ」32.0%（男36.2%，女22.0%）で、第一回調査と同水準になっている。ことに、男子学生にテレビを見て過ごす者が増えており、後述の番組内容とあわせ考えると興味深い分析が可能である。第三位は「友人との談話」31.5%（男31.7%，女31.3%）であり、徐々に男女差がなくなっていく傾向にある。注意すべきは第五位になった「読書」（24.6%）である。わずかながらではあるが、回を追うごとに下降の一途をたどっている。その主たる原因として男子学生の本離れが指摘されよう。読書については大学差が認められ、大阪大学が前回同様40.2%と高率を示している一方、大阪産業大学12.3%，大阪工業大学12.8%と低い値となっている。対照的に、後者2校は「ドライブ」においてそれぞれ26.0%，24.4%と他校に比べ高い数値を示し、大阪大学においては1.1%である。前回逆転した「アルバイト」の女子優位は、今回も持続している（男22.9%，女37.7%）。大学別では、三重短大Ⅰ部の学生にアルバイト従事者が多い（47.4%）。

三重短大ではⅡ部（夜間部）の学生を対象にした調査も行なっている*。Ⅱ部学生では、余暇の過ごし方の目立った特徴として、「ドライブ」が非常に多く（男57.1%，女22.7%），男子学生の場合、「読書」（14.3%）と「レコード，FM放送を聞く」（25.4%）がⅠ部大学生と比べて少ない。余暇を外で過ごすという気持はⅡ部女子学生の7割近くが「食べ歩き，ショッピング」をすることにも窺える。勤労者なので、独身者の場合、経済的に余裕のあることも外出志向の一因となつていよう。また、当然のことながら余暇に「アルバイト」をするⅡ部学生はゼロに等しい。

次に一週間の時間の使い方について考察する（図2参照）。「読書」については、男子学生では3

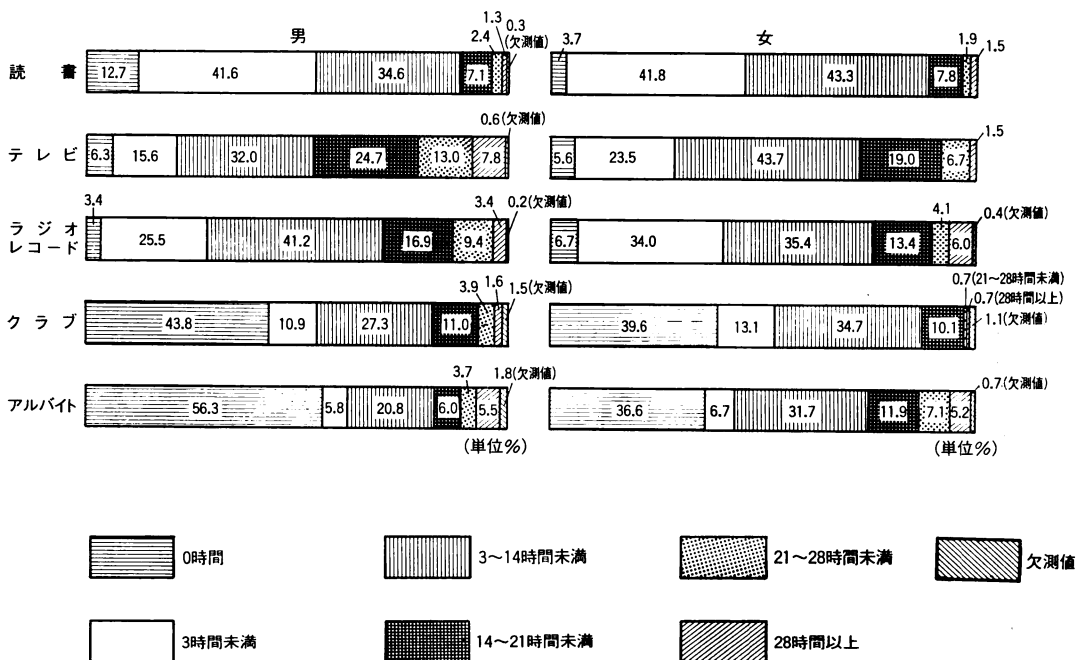


図2 時間の使い方

時間未満が最も多く（41.6%），女子学生では3時間～14時間未満が最も多い（43.3%）という傾向は前回と変わらないが、全体的に読書時間は少なくなっている。

*Ⅱ部学生には勤労学生が多いという特殊性から、他大学とは別個に集計を行った。

「テレビ」を見る時間は男女ともに3時間～14時間未満が多い（男32.0%，女43.7%）が，男子学生の中かで，テレビ視聴時間が週14時間を越える者が半数近くいることは特筆すべきであろう。テレビを見る時間が読書時間を大きく削っている一因となっているのであろう。

「ラジオ，レコード」については，前回同様，男女とも3時間～14時間未満がもっとも多く（男41.2%，女35.4%），全体的傾向にも変動はあまりない。

「クラブ活動」を全く行わない学生の割合が男女ともにもっとも多いことは前回結果と変わらないが，男女間で逆転が生じ，女子学生にクラブ活動参加者が多くなっている。また，3回の調査を通じ，男女ともにクラブ活動参加者が増加傾向に

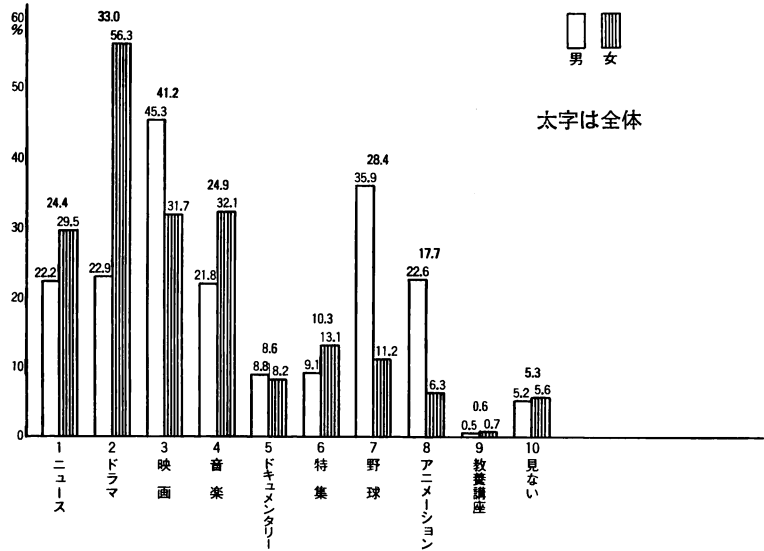


図3 よく見るテレビ番組

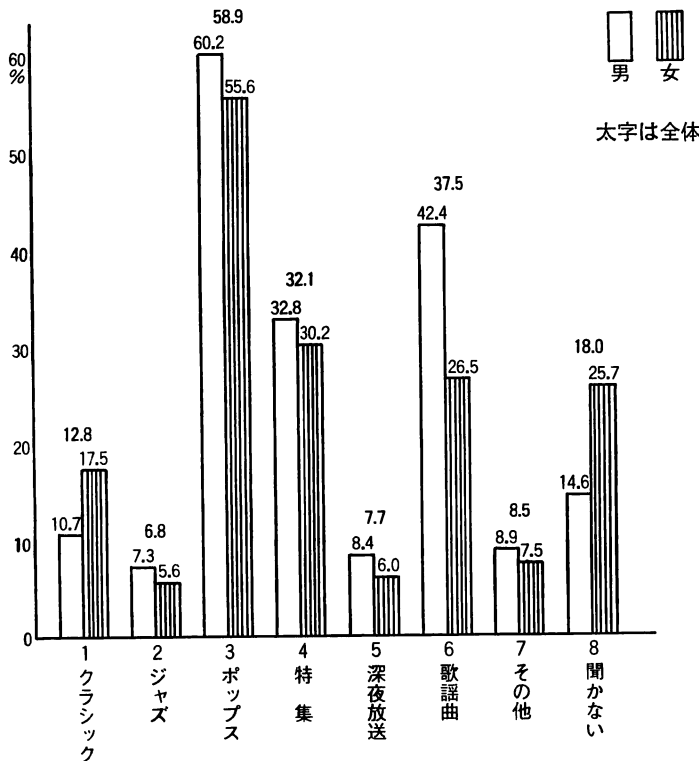


図4 よく聞くFM番組

あることがわかる。クラブ活動参加者の多くは週14時間未満を活動にあてている（男38.2%，女47.8%）。

「アルバイト」についても，全く従事していない学生が男女を通じて多く，全体で50.4%（男56.3%，女36.6%）である。過去の調査と同じく，今回も男子学生より女子学生の方が積極的にアルバイトに従事している。クラブ活動と同様に，アルバイトに従事する学生の割合は男女ともに増加している。

テレビ番組については，映画（41.2%），ドラマ（33.0%），野球（28.4%）の視聴率が高いが，

いずれも男女差が大きい（図3参照）。映画については、前回は男女差が顕著ではなかった。さて、今回は男子学生のニュース視聴率に注目してみよう。第一回調査では37%，第二回28.8%，そして今回22.2%と回を追うごとに男子学生はニュースを見なくなっている。それに対し、女子学生は3回の調査を通じ、一定の視聴率を保っている。そのため、前回、ニュース視聴率は男女間で逆転し、今回その差を広げており、第一回調査報告で述べた「ニュース男、ドラマ女」という図式が崩れてしまった。前述のとおり、男子学生のテレビ視聴時間自体は伸びているのだが、それはアニメーションなど娯楽番組を見るためにあてられていると考えられる。このように男子学生が主体性のない、受け身的なテレビ視聴態度を取りはじめていることは憂慮すべきである。他方、Ⅱ部学生のニュース視聴率は男女とも高率で（男39.7%，女40.9%），社会人としての自覚が認められる。

ラジオ番組FM放送については、前回同様、ポップス、歌謡曲、特集の人气が高いが、なかでもポップスは男女ともに50%を越える伸びを示している（図4参照）。歌謡曲において、男女差が前回と逆転したうえで、その差が顕著であることが目につく。また、FM放送を全く聞かない学生数は減少している。AM放送については、D・J、リクエスト番組、深夜放送が高率であることは前回と変わらないが、D・Jでは男女差が逆転し、深夜放送における男女差がさらに大きくなっている（図5参照）。男子学生は、テレビが終わった後、深夜放送を聞いて過ごしているのだろうか。AM放送を全く聞かない学生は、FM放送とは逆に、特に女子学生に増えているようである。

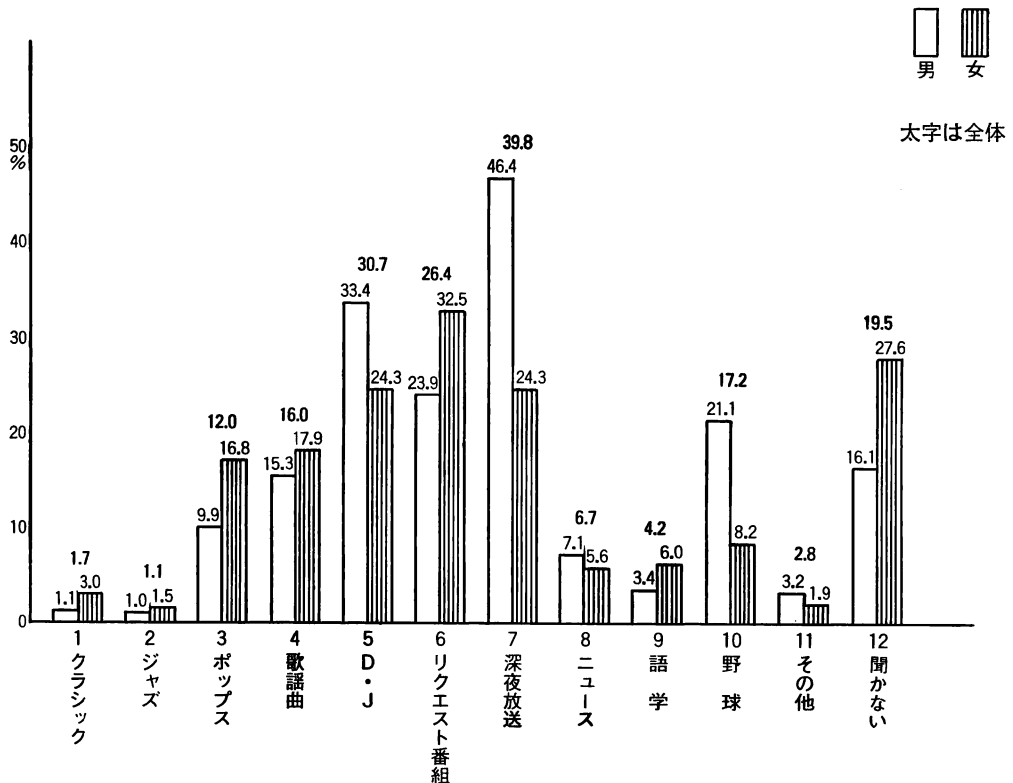


図5 よく聞くAM番組

・読書傾向と好きな作家

このような調査において読書傾向といったものを端的に示すような質問項目を設定することは容易なことではない。前2回の調査において試行錯誤をくり返した結果、今回は「あなたが最近読んで印象に残った本を1冊あげて下さい」という質問項目を採用した。

前回までは3冊あげてもらおうということであったが、回答者数の増加により、傾向を鮮明にするために1冊をあげてもらおうようにした。好きな作家についても同じような考えの元に1名をあげてもらおうことにした。雑誌ではジャンルが明確であり多岐にわたるためどうしても3冊程度あげてもらおう必要があると考え従来通りとした。特に雑誌ということになると現代学生のコミック好きが反映されるので1冊をあげてもらおうのは不適當と考えたからである。

表15は男子大学生の印象に残った本ベストテンであるが、1位から5位までがマスコミにのった本かあるいは映画化された本である『探偵物語』、『汚れた英雄』、『時をかける少女』はいずれも映画化されており、角川商法にのったものである。学生に直接きいてみると、映画化されたものはまず読むということであった。現代の学生達はまだ「見てから読むか、読んでから見るか」というコピーにふり回されているようである。このコピーの意味するところは、「読んでもらい、見て(映画を)もらったら倍儲かる」ということなのであるが、このような商業主義に踊らされていることには学生

は無頓着なようである。彼等は一樣にこう言う「そやけど、読まへなんだら皆について行かれへんもん」、皆の話題について行けないことによる孤独感と闘ってまでも主体性を發揮してほしいものだ。

一時、家であまりテレビを見せてもらえない小学生がそのようなことを言っていたのを思い出す。『気くぼりのすすめ』も内容の割には読んでしまったという学生が多いようである。著者のお茶の間の人気にのった出版物であろう。それらの上位の本の中で、ここ数年コンスタントに学生に読まれているものが『(真)幻魔大戦』である。大学生の読書調査では必ずといっていいほど上位に顔を出している。6位の『ところ』も筆者等の調査では毎回上位に入っている。『三国志』、『竜馬がゆく』といった歴史物が少し顔を出しているが、これ等の読者は大学間の偏りが少ないことから、読者としては一定の傾向をもった比較的主体的な読書好きの学生とみていいのではないかと思われる。『さよならジュピター』は小松左京のSF大作の一つであるが、1983年7月の調査の時点では映画化の情報あまり一般化していなかったためこれらの読者も比較的固定化したSFあるいは小松左京ファンであろう。映画は1984年3月10日に封切られマスコミにおいてかなり派手にとりあげられているため、1984年の調査ではもっと上位にくることは容易に予想される。表16は女子学生に関するものであるが、『細雪』が1位にきており、やはり映画化の影響がうかがえる。『人間失格』は3回の調査で常に上位にきているが、女子大学生の太幸好きを物語っている。3位の『シンデレラコンプレックス』は女性の自立の困難さを深層から探ったもので、一時のウーマンリブの傾向とは少し違った趣きをもっているが、それだけに女性にとって深い自己反省と女の置かれた社会的位置の自己洞察をやむ

読んだ本ベストテン

表15 男子大学生

順位	書名	度数
1	探偵物語	16
2	汚れた英雄	9
3	気くぼりのすすめ	8
4	真幻魔大戦	8
5	時をかける少女	7
6	ところ	6
7	三国志	5
8	竜馬がゆく	5
9	積木くずし	5
10	さよならジュピター	5

表16 女子大学生

順位	書名	度数
1	細雪	5
2	人間失格	4
3	シンデレラコンプレックス	3
	武蔵野夫人	3
4	気くぼりのすすめ	2
	時をかける少女	2
	朱鷺の墓	2
	敦煌	2
	女坂	2
	宣告	2

なくさせる本といえるであろう。女子大学生の問題意識の一つとしてとらえたい。4位以下は度数が少ないためなんとも言えないが、大学によって偏りがみられるため、おそらく文学、語学の授業で取り扱われた本とも考えられる。男女の比較において最も注目すべきことは、度数の大きさが今回の調査では男子大学生の方が大きいということである。

男女の比率は前回の調査が男女ほぼ1:1であったが今回では、ほぼ2:1になっており、男子大学生の方が大きな比率を占めているために生じたとも言えるが、このようなサンプルの男女比を上回る差があらわれているように思われる。度数の集りが今回始めて女子学生が低下している（男子1位が16、女子1位が5）、1980年の第一回調査では、男子大学生の第一位が『ノストラダムスの大予言』で度数8、女子大学生が『こころ』、『人間失格』でいずれも度数は10、1981年の第二回調査では、男子大学生の第一位『こころ』、『人間失格』で度数は14、女子は第一位『蒼い時』で度数は33となっている。前2回の調査では、始めに述べたように、3冊の本をあげてもらったが、今回は1冊をあげてもらっただけであった。

その方法の違いによる影響はあるかも知れないが、条件としては男女とも同じであることを考えると、この度数の逆転は何を意味するのであろうか。第2回調査では女子学生の度数の集中度が高い傾向を、一つのファッション化であり、流行によわい没個性化と述べたが、今回の調査では、むしろ女子学生の方が主体的で個性的な傾向があらわれているのではないかと思われる。この傾向は余暇の過ごし方、時間の使い方にもあらわれている。表15と表16を比較するとどうみても男子学生の方が軽読書の傾向があるように思われる。1983年に入ってから、女性の自立や生き方に関する社会的な動向が変化しはじめたようである。例えば、雇用差別に関する法的な問題、パート職の保護、減税の問題、出版界を見ても、『シンデレラコンプレックス』を始めとする一連の女性問題に関する書物の出版、平塚らいてふの著作集の再版といった出来事が相ついでいる。また地方講演会、カルチャーセンターの講座においても女性の生き方に関するものは増えている。

また新聞の紙面においては、既婚女性の職場復帰の比率の増大（55%）の結果、今や働き続けるキャリアウーマン型（17%）と、専業主婦指向型（19%）はそれぞれ5人に1人の割合になってきているという（1984、3月19日朝日新聞）今回の調査の度数についての考察をこのような女性の社会問題一般と結びつけるのは早計であるかも知れないが、筆者等の大学での経験からも、男子大学生に比べ女子大学生の方がはるかに生きる事、将来の事に対する問題意識は高いといえるようである。

ともあれここ数年は女性の自立への意識は過渡期にあるといえる。働く女か、主婦かといったことをめぐって社会的価値観も大きく揺れ動くのではないかと思われる。次回の調査においてどのような傾向が現われてくるかを興味深く待ちたい。

大学生協の調査では、読みたい本のジャンルはトップは何と「専門に関する本」で26%、次いで「政治・経済・社会の動きを知る本」23%、「現代小説」が20%となっているが、この生協の調査ではあくまで希望にしかすぎないことを、今回の筆者等の調査では物語っているといわねばならない。「あるべき姿」と「ある姿」はかくも違うのであるが。「読書は心の糧」としている大学生が90%を越え大半の学生が今の読書時間の倍は必要（一日平均120分）と考えていることから、「あるべき姿」をめざすべきだと考えているのはどうやら本当のようである。これは情報過多の中での真に求める情報の不足を物語ってはいまいか。大学の教師による適切な読書情報や読者案内も現代の学生にとっては必要なものではないかと思われる。好き勝手な書物をも彼等はすでに選べなくなっているのではあるまいか。

表17は男子大学生の好きな作家ベストテンであるが、星 新一、筒井康隆、夏目漱石といった上位に出てくる作家は過去2回の調査と同じであるが、昨年あたりから若い層でちょっとした赤川次郎ブームだといわれているのを反映してか、3位にランクされている。このブームも作られたものといえるが、1つの特徴は、従来の推理小説とは異なった軽妙さと明るさにあるといえよう。視覚的映像的というかテンポが速く場面転換のすみやかさは映画を思わせるようなところがあり視覚的とはいえまだ心像派の筆者などは読んでいてどきまぎしてしまうのだが。学生にきいてみると難なく読めるということであった。現代学生のテンポに

合っているであろう。推理作家では松本清張、横溝正史らが姿を消している。

一方、あだち充のような劇画作家が8位に出てきているが、好きな作家の中に劇画作家が登場するというのも現代学生の著しい特徴であろう。

表18は女子大学生の好きな作家であるがやはり女流作家が数名あげられている。女子学生の太宰好きは相かわらずであるが、渡辺淳一、井上 靖、遠藤周作といったところは比較的コンスタントに女子学生に人気があるといえそうである。一方、赤川次郎がランク外であり、男子学生では3位になっているのと対照的である。前2回の調査と比較すると女子学生では徐々に推理小説ばなれが起っているといえそうである。女子学生の推理小説好きは、二、三年前ではほとんどの調査で指摘された傾向であったが、今回の調査では、好きな作家の中では一人も推理作家はベストテン内に入っていない

好きな作家ベストテン

表17 男子大学生

順位	作 家	度数
1	星 新一	34
2	筒 井 康 隆	30
3	赤 川 次 郎	28
4	夏 目 漱 石	20
5	小 松 左 京	14
	大 藪 春 彦	14
6	遠 藤 周 作	13
7	平 井 和 正	11
8	あ だ ち 充	10
9	ク リ ス テ ィ ー	9
	司 馬 遼 太 郎	9

表18 女子大学生

順位	作 家	度数
1	三 浦 綾 子	15
2	筒 井 康 隆	11
3	夏 目 漱 石	10
	太 宰 治	10
4	遠 藤 周 作	9
5	井 上 靖	7
6	渡 辺 淳 一	6
	田 辺 聖 子	6
7	星 新一	5
	曾 野 綾 子	5

雑誌ベストテン

表19 男子大学生

順位	雑 誌	度数
1	少年サンデー	187
2	少年マガジン	120
3	少年ジャンプ	115
4	週刊 プレイボーイ	57
5	フォーカス	44
6	G O R O	42
7	ヤングジャンプ	40
8	ポ パ イ	36
9	L マ ガ ジ ン	34
10	オートバイ	28

表20 女子大学生

順位	雑 誌	度数
1	ノ ン ノ	88
2	別冊 マーガレット	38
3	ア ン ア ン	32
4	フ ォ ー カ ス	24
5	J J	23
6	With	16
7	花 と ゆ め	15
8	La La	11
	モ ア	11
	少年ジャンプ	11

し、表16の読んだ本の中にも推理小説はベストテンに入っていない。作家を比較してみても、男子学生の方は軽読書がすすみ、女子学生の方が選択的、意識的な読書をしているのがうかがえる。宮尾登美子などは比較的読んでいるのではないかと予想されたが全く出てこなかった。読者層がもっと年齢が高いのであろう

・雑誌傾向

表19は男子大学生、表20は女子大学生の雑誌ベストテンであるが、こと雑誌に関していえば、前2回ともほとんど同じ傾向であるし男女の間に目立った差は見られない、つまり男子学生で

は「少年サンデー」「少年マガジン」「少年ジャンプ」「週刊プレイボーイ」といった順位であり、女子学生の方は、「ノンノ」「アンアン」、そして「別冊マーガレット」というコミックが上位を占めている。前2回の調査に顔を出していないもので今回上位に出てきているものに「フォーカス」が挙げられる。この雑誌は、速報性と写真を中心とした雑誌であり、テンポの早い現代が生んだ雑誌と言えよう。学生も「フォーカス」の持つ話題提供性を買うのであろう。雑誌においても男女の度数の変化は著しい。前回調査では、女子学生の第一位はやはり「ノンノ」であったが度数は267という高さであった。今回はそれがわずか88になっている。一方男子学生の方をみると、前回の一位が「少年ジャンプ」で141、今回は「少年サンデー」で187と高くなっている。これらの変化もサンプルの男女比以上のものと言えるであろう。

以上みてきたように、余暇の過ごし方や、時間の使い方、読書傾向等において、男子学生がますます娯楽番組指向、軽読書指向へとすすみ、主体性のない没個性化へと向かっているように思われる。これらの傾向は政治意識の底辺を支える生活意識の中において顕著にあらわれているといわねばならない。政治意識における大学差ほど生活意識においては大学差が顕著に認められないことからもうかがえる。

読書傾向の分析にあたっては、昨年来学生の読書傾向に関する情報を提供していただいた大阪産業大学工学部の坂本勇教授に負うところが大きい。紙面を借りてお礼申しあげたい。